

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

91  
SUMMER  
2022

# ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



## 眼の極楽 40

## 花と鳥のかたち

特任館長 榊原悟



図2



図1

(承前) その作品とは、伊藤若冲(一七一六—一八〇〇)の『枯木鷲猿図』(図1) こう呼ぶのが一般的だが、実も葉もあるのだから「枯木」の命名でよいのか)である。蕭白だから、次は若冲でもないのだが、これもまた鷹の縁に連なると云うのも面白い。その図、制作は宝暦五(一七五五)と推定されている。若冲の四十代初め、あの一代の傑作『動植綵絵』(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)の制作にとりか、る直前となる。図は、純白の鷲が樺の幹に留まる。片方の羽だけを拡げ、いままさに舞い降りたところ、と云った風情だ。しかし樺の枝に爪を立て、がっしりと掴む二本の脚や胴の開き具合、首と頭部の向きなど、その姿態は、現実にはあり得ない無理なポーズではないか。レース編みのような羽根が美しい。後に『動植綵絵』の「老松白鳳図」や「老松孔雀図」でも用いた手法で、若冲得意の描写である。画面右下、実を食べに来ていたのだろうか、猿が岩陰にとっさに身を隠す。両耳を押さえたしぐさが何とも人間的だが、その姿態からは恐怖が手にとるように分かる。ムンク(一八六三—一九四四)の『叫び』の人物が全く同様の姿態を取るのも偶然ではあるまい。まさしく恐怖におののく姿だが、一方の鷲は「うぬ見ぬ鷲」(図2)。すなわち一図が「何も怖れぬものがないこと」の譬えを絵画化したもの、と見たのは狩野博幸氏で(没

だが、それだけだろうか。読者は既に一度その形に遭遇しているはずだと云えば、もうお分かりだろう。そう、ここでもまたページニア本である。その右隻才五扇、蛇行する栗の木である(図3)。その姿かたち、おかれた情況は異なるが、猿と共に描かれていることも考えれば、樺(団栗)と栗と云うのは何とも意味深長。二本の樹幹の形状の一致は、それが偏奇と評されるほどに特異で不合理なかたちであるだけに、とても偶然の結果として似ているとは思われず、むしろ両者に影響関係を想定する方が、余程合理的であるだろう。若冲は、明らかにページニア本を淵源とする、逆S字形の樹幹に係わる図像情報を持っていたのである。とは云え若冲が、その情報をページニア本から直接得たとは考えにくい。両者の年代の違いもさることながら、若冲の樺とページニア本の栗とは、形状を似通わせながらも決定的に異なるところがあるからだ。前者の幹にはうろが大小とり混ぜ、繁雑とも云える程に多数うろが入れられているに過ぎないから。いかに若冲のうろは、驚くべき数と云い、大きさと云い、どこか強迫観念に掻き立てられ描かれたかのようだ。そう思っで見れば、これは眼か。いや、その形態からは剥き出しの女陰にも見えるのだが、こうした特異なうろは、『動植綵絵』の「老松白鳳図」の老松に入れられるなど樹木の種類とは関係なく、そうであればこそ若冲のこだわりのかたちとも云えるはずで、ここまでくれば、もう描いた絵師のころころ心理の問題となる。となる、このうろこそは若冲その人に帰されるべき表現か。いや、それだけではあるまい。その同じうろが、あしらわれた数こそ違え、既に述べたように蕭白作品にも見出されるからである。それを手掛りに曾我二直庵から蕭白への影響を断じたのは佐藤康宏氏であった(佐藤氏前掲書 所収「蕭白新論」)。慧眼である。そして、先に蕭白が急降下する鷹の図像情報を得たのと同様の入事情報を、若冲のこの蛇行する樹幹のかたちの場合にも想定できるのではなかったか。要するに、ここでもまた二直庵が曾我派を介していた、とみるのである。その樹幹に留ませたのが曾我派の象徴とも言うべき鷲であったことが、何よりそうした二直庵との係わりを物語る。となると、俄然、気になるのはレース編みのような、あの白鷲である。無理なポーズをとると述べたはずだ。しかし二直庵の作の中に鷲ではないが、こんな鷹が描かれていた(法隆寺本『鷹図』三幅対のうち右



図3

後二〇〇年 若冲「展図録作品解説 京都国立博物館 二〇〇〇年」、まさしく卓見、無理なポーズとは云え、鷹のゆったりとした姿態に云え、驚わされている。だが、注目して欲しいのは、それではない。鋭く逆S字状に屈曲する樺の幹だ。そのかたちに若冲の偏奇な形態感覚が浸透している、と見るむきもある(佐藤氏前掲書作品解説)。



幅(図4)。木に留まる脚の位置、胴の開き具合が異なるが、姿態には通じ合うところが少なくない(中幅の鷹が、レース編みのようだとお世辞にも言えないが、白鷹であるのもこの際氣に掛かる)。それが類例乏しい特異なポーズであるだけに、ここにもわたしは二直庵からの影響があったのでは、とみたいのだが……と云えば、いや、そもそも鷹を描くのは、「うゑ見ぬ鷹」の譬を表現するため、必然的に要請されたことではなかったかと、と言われるであろう。確かにそうである。つまり鷹を描かなければならなかったこと、そのこと自体が、二直庵とこの蛇行する樹幹と特異なうろ、それらすべてを呼び込んだ。これが、そもそもこの場合の若冲の制作の実際ではなかったか。だが、これによって若冲と二直庵、そしてパージニア本との係わりが確認されたことの意義は、実に大きい。

蛙を見る眼

言うまでもない、その若冲は、『動植綵絵』に「池辺群虫図」(図5)を遺した絵師だからである。虫の小宇宙にも大いに関心があつたことは間違いない。その若冲の虫への眼が何に由来するのか。それを知るために唐絵草虫画の存在は無視できない。今回、その若冲の眼の内実が、パージニア本に描かれた具体的なモチーフによって確かめられたのである。だが、若冲と唐絵草虫画は常州草虫画との係わりについては、わたしたちの関心とは自ずから異なるが、実は既に佐藤康宏氏の慧眼によって指摘はされている(佐藤康宏著『若冲伝』オニ章模写と写生―初期作品 河出書房新社 二〇一九年)。そこで同氏が、常州草虫画の系譜に連なる若冲の作として取上げた『隠元豆・玉蜀黍図』(図6 草堂寺蔵)は、わたしたちの問題にモチーフ選択の点からも、まことに興味をひく。その右幅、隠元豆と蛙が描かれている。葉の上には蠶斯が一匹、さらにもう一匹はさかさまで、葉から葉へ肢を掛ける無理なポーズにも見えるが、虫の世界ではあり得るもので、こんなところからも若冲の虫への熱い関心が窺えるのではないだろうか。しかもその蠶斯が留まる隠元豆は、画面上部に天蓋のように蔓を伸ばす。既に直庵の『双鶏養雛図』の右幅、葡萄でも見たかたちだ。取上げたモチーフと云い、図様構成と云い、『隠元豆・玉蜀黍図』は常州草虫画そのもの、とさえ云つてよいだろう。そこに池に面して坐る蛙。行い澄ましたかのように端然と座るその姿が、どこか人間臭く面白いが、同様の蛙が、なんと『動植綵絵』の「池辺群虫図」や『玄圃瑤華』(明和五年・一七六八)にも登場するではないか(図7)。その蛙は、

生きとし生けるもの。いづれか歌をよまざりける 『古今和歌集』仮名序

と説かれ、「花に鳴く鶯」と共に和歌(韻文学)の世界の象徴的存在とされた、あの蛙であるはずもない。むしろ池辺に生きる蛙である。虫を捕食し、運が悪ければ蛇や鳥たちに捕食される、そんな自然の営みの下にある蛙である。若冲は、その蛙の姿を描いた。

庭に鶏を飼い、その姿を観察、生写したと云う若冲である(大典顕常「若冲居士寿蔵の碣銘」となれば、同じく村里で日常的に目にすることが可能な蛙についても、同様の手続きを経て描かれたのではなかったか。おそらく少なからぬ読者が、そう思ったに違いない。若冲ならば、と云うところである。

しかも若冲の時代・十八世紀半ばともなれば、虫に対する関心、虫を見つめる眼は、既に充分熟していたのではなかったか。若冲に、そうした眼と心があつ

たことを教えて呉れる史料は、遺憾にして管見の及ぶところではないが、しかし若冲と同時代人、と云うより同じ年(享保元年・一七二六)生まれの蕪村ならば、連載の冒頭で、こんな句を紹介して置いたはずだ。

みじか夜や毛むしの上に露の玉

この際もう一句、同じ蕪村の、眼を驚かすに足る毛むし句を上げて置く。朝風に毛を吹かれ居る毛むし哉

庭木の剪定で、チャドクガの幼虫に刺された苦い経験を持つわたしは毛虫が苦手だが、この句については、一読、視覚と触覚が大いに刺激された。感嘆すること久しい。見事な俳諧の修辞学である。毛虫ならずとも、夏の朝の涼風が肌にごち好い。その句を詠んだ蕪村は、間違いなく毛虫に関心を寄せ、これを見つめたこと(凝視だ)があつたはずだ。同じ京の地に在った同時代人として若冲にも、同じ眼があつたに違いない。と云うより「池辺群虫図」を描いたこと自体が、そうした眼の関心の所在を物語る。現にその「池辺群虫図」には確かに毛虫もいるのではないか(図8)。となれば、あの蛙は、やはり若冲自身の生写に基づくものなのか(未完)。



図8



図6



図4



図7



図5

- 図1 「枯木鶯猿図」伊藤若冲筆
- 図2 「うゑ見ぬ鷹図」西村重長画
- 図3 「栗に猿図」パージニア本「花鳥草虫図」屏風「右隻第五扇」
- 図4 「鷹図」三幅対のうち右幅 曾我二直庵筆
- 図5 「池辺群虫図」『動植綵絵』のうち 伊藤若冲筆
- 図6 「隠元豆・玉蜀黍図」うち右幅 伊藤若冲筆
- 図7 蛙 「玄圃瑤華」より 伊藤若冲画
- 図8 毛虫 「池辺群虫図」より 伊藤若冲筆

EXHIBITION

## ルネ・ラリック

—アール・デコのガラス モダン・エレガンスの美

田中 裕紀乃

会期 令和4年6月4日(土)～8月28日(日)

## ❶ 北澤美術館ってどんなところ？

本展覧会の作品は全て、長野県諏訪市にある北澤美術館の所蔵作品で構成しています。作品点検のために数日滞在したのですが、ロケーションが素晴らしく、ホテルから諏訪湖のほとりにある美術館までお散歩するだけでも気持ちが良い爽やかな気持ちにさせてくれます。諏訪の魅力は諏訪湖だけではありません。過ごしやすい気候、おいしい蕎麦に日本酒、そしてなんととっても温泉です！諏訪湖の河岸には公営の足湯もあって、癒しを求める人にはピッタリの場所です。さて、そんな魅力的な市に位置する北澤美術館は、エミール・ガレとドーム兄弟をはじめ一九世紀末のアール・ヌーヴォーから、二〇世紀初頭のアール・デコ期にかけてのガラス作品、およそ一〇〇〇点を所蔵する美術館として、世界的にも知られています。展示室に入ると、ガレの代表作《ひとよ茸ランプ》が私たちをお出迎えしてくれます。今回の展示を見て、ガラス作品に興味を抱いて下さった皆さん、是非諏訪の北澤美術館にも遊びに行ってみてください！



テーブル・センターピース《三羽の孔雀》1920年 北澤美術館 撮影：清水哲郎

## ❷ ラリック展について

今回の「北澤美術館所蔵 ルネ・ラリック アール・デコのガラス モダンエレガンスの美」展では、北澤美術館の所蔵作品のうち、ルネ・ラリックの秀作を選び、約二〇〇点をお披露目いたします。どの作品もそれぞれ魅力があるので、一点一点ご紹介していきたいところですが、字数も限られていますので、僥倖ながら作品をピックアップしてご紹介させていただきます。

## ❸ エレクトリック・エイジ

展示室に入って、一番最初に目に飛び込んでくるのはテーブル・センターピース《三羽の孔雀》です。その名が示す通り、ディナーテーブルの中央を飾るもので、一八世紀から一九世紀にかけて、貴族や大ブルジョワの食卓を豪華に飾りました。テーブル・センターピースが飾られるような、豪華な食卓には一体どのような感じが載っていたのか、想像力が掻き立てられます。本作は、当時まだまだ最新技術だった電気照明が仕込まれており、現代的な豪華さが演出されています。ガラスの厚みに光がゆきわたり、奥行きのある華やかな装飾が浮かび上がります。作品の裏にも回って頂けるように展示していますので、じっくりとご覧になって頂きたい作品です。

## ❹ オパールセント・ガラス

次にご紹介したい作品は、花瓶《バックカスの巫女》です。この作品は、宝石のオパールに似た乳白地のオパールセント・ガラスを用いた作品です。正面からの光では、まるで青空に浮かぶ白雲のように輝き、後ろから光を受けると、夕焼け雲のように赤く染まります。この花瓶で表されているのは、ワインと豊饒の神バックカスに仕える巫女の輪舞です。ポーズの異なる一〇人の裸婦が、陶酔の



渦に身を任せ回転しているように見えます。巫女たちは、光を透過してワインに酔ったように赤く染まっています。光の角度によって色調の変わるこの不思議な作品を是非、目の当たりにして下さい。



花瓶《バックスの巫女》  
1927年 北澤美術館 撮影：竹本春二

シール・ペルデュ

シール・ペルデュ《西洋さんざし》は、「シール・ペルデュ技法」による一点制作作品です。ラリックのガラス工芸は金型を活用した量産がベースですが、初期から晩年にわたり限られた上顧客のために、シール・ペルデュ技法による一点制作が行われていました。「シール・ペルデュ」とは原型にロウを用いる特殊な製造法です。古代から貴金属やブロンズの鑄造に用いられていた製法をラリックがガラスに応用しました。「蠟型鑄造」あるいは「ロスト・ワックス」ともよばれ、ひとつの原型から一点しか造り出せないことから、ルネサンス時代のメノウや水晶細工のように珍重されました。本作は、ラリック作品を愛好したランスの実業家でシール・ペルデュの最大のコレクターであったジョルジュ・シャルボノーの旧蔵品です。本作の構想を描き留めた下絵の一枚も現存しており、展示室に飾られているので是非見比べてみてください。

香水瓶

香水瓶は、競争の激しいガラス産業へ参入の糸口を与えてくれた重要なジャンルです。ジュエリーづくりで鍛え上げた細密加工技術のおかげで、小さなガラス瓶に浮彫を施すという、それまで誰にもできなかった制作を実現しました。目には見えない香りの魅力を瓶の造形で伝えるラリックの香水瓶は評判となり、名だたる香水メーカーがラリックに依頼を行うようになりました。優美で華やかなティアラ形のデザインや（左写真）、難技法「型吹きプレス同時成形」など、手の平に載るような小さな世界に、美的にも技術的にもラリックのすべてが込められています。



花瓶《西洋さんざし》  
1921年 北澤美術館 撮影：清水哲郎

カーマスコット

「カーマスコット」とは、自動車のボンネットの先端にあったラジエーターキャップの装飾品です。



香水瓶《カシス》  
1920年 北澤美術館 撮影：清水哲郎

アール・デコ期の一九二〇年代から一九三〇年代は自動車の普及が進み、ラジエーターキャップの上に載せる金属製のマスコットが流行しました。ラリックは、オーナーの個性を際立たせるために、狩りのテーマや女性像など、好みに応じて選ぶことのできるガラス製のマスコットをつくり出しました。照明を組み込むことも可能で、カラーフィルターの交換によって、様々な色に輝かせることができました。しかし一九三〇年代になると、安全面から規制されるようになり、カーマスコットは次第に衰退していききました。カーマスコットは、時代を象徴する面白いアイテムであったと言えます。



カーマスコット《勝利の女神》  
1928年 北澤美術館 撮影：清水哲郎

本展覧会は、ラリックのガラス作品を約二〇〇点展示しています。まだまだ伝えきれない魅力がたっぷりあるので是非、当館で直接作品を見ていただけたら、と思います。暑い夏にピタタリの涼しげなガラス作品を是非岡崎市美術館にてお楽しみください。

水冷蔵庫は、電気ではなく氷を使って、氷の冷気により食品を冷やします。

食品を冷やして貯蔵する冷蔵庫が日本でデビューしたのは、明治三十六年（一九〇三）の第五回内国勸業博覧会のことでした。当時は「氷箱」と呼ばれ、前面に扉のついた長方形の箱で、上の板を開けて氷を入れる形でした。それが徐々に改良が加えられて、頑丈な木組みに密閉できる扉、上下二段に分かれる二ドアタイプとなり、明治時代終わり頃から製造されるようになりました。

一般的な二ドアタイプの水冷蔵庫は【写真1】のような形をしており、掲載品は昭和初期の頃のもので、木製のどっしりとした外見は置くだけで存在感があります。大きさは幅四八・奥行四六・高八四cm、上段に大きな水、下段に食品を入れます。二つの扉は冷気が外に逃げないように、重たい鍵でしっかり閉まります。内側はトタン張り、壁にはコルクやおが屑、石綿などを断熱材として詰めています。保冷の原理としては、現在のクーラーボックスと似ています。上下の間はすのこで繋がっていて上から冷気が下りてきて食品を冷やすのです。また、溶けた水は上段下部の排水管に流れ、水抜き穴から本体の外に排出される仕組みになっています。



写真1

そのため、水冷蔵庫はよく土間に置かれていました。入れる氷は、一日に一貫目から二貫目（二貫目＝三・七五kg）が使用されました。氷は製氷業者（氷屋さん）から購入し、毎朝、氷屋さんがりヤカーや荷車に大きな氷の塊を載せて配達をし、一貫目、二貫目単位でのこぎりで切り落として各家庭に運んでくれました。氷で冷やすのですから、あまり冷たくはならず、内部の温度は一〇〜一五度ほどだったと言われます。水冷蔵庫を一年中使用するのは商店などごく一部で、家庭では夏季のみ

## 暮らしの道具箱

### ぜいたく品だった!? 水冷蔵庫

伊藤 久美子



がほとんど。路上で氷屋さん氷を切る光景は、電気冷蔵庫が普及する前の夏の風物詩でした。

【写真2】は幅八二・奥行六四・高一二一cmの大型品。かつての国鉄岡崎駅前にあった料理旅館「清風軒」で使用されていた業務用冷蔵庫です。清風軒旅館は大正七年（一九一八）に建築され、多い時には一度に六〇人ほどが宿泊したと言われています。水冷蔵庫も容量たっぷりな訳です。

水冷蔵庫は食品に匂いが付きにくく、かつ適度な湿度があつて乾燥しにくいので、鮮度を保ちやすいところが一番の特徴です。そのため、生鮮食品を扱う商店や飲食店ではとくに重宝されました。

一般家庭へは、大正から昭和初期にかけて普及が進みましたが、実際には都市部での使用が中心だったようです。理由の一つとしては氷を毎日補給する必要性から、氷屋さんが近くにいないければ使用できないという点が挙げられます。冷蔵庫自体の値段が高かつたうえ、非常に手間と費用がかかるということで、水冷蔵庫はぜいたく品だったのです。また、昔は肉や魚などの傷みやすい食品は必要な時に買う、まとめ買いせず、毎日その日に食べる分だけを買うことが普通だったため、冷蔵庫が



写真2

ない家庭は多くありました。食品を冷やして貯蔵する冷蔵庫は、従来の食生活では必需品とは言えなかったのです。水冷蔵庫が爆発的に売れたのは昭和二〇年代中頃から三〇年代中頃まで。昭和五年（一九三〇）から製造されていた国産の電気冷蔵庫が、昭和三〇年代後半になって大量生産されるなどして価格が下がって、家庭用電気冷蔵庫の普及が急激に進んでくると家庭の台所から水冷蔵庫は姿を消し、次第に忘れ去られていったのです。



休館情報

美博、半年休館するってよ！

今秋から年度末まで改修工事（第一期）のため休館します。

というのも昨年で開館二五年が経った当館は、いよいよアラサーを迎えようとしており、何かと曲がり角のお年頃。見えるところ、見えないところにもガタがきていてケアが必要なのです。

休館明けの来年の春、「アトリウムがスカイツリーみたいに変身！」「あの世界的建築家が設計した建物が増築されました！」：残念ながら今回は、工事前後の変化がわかりやすいものではありません。あくまでも改修。あちらこちらにきているガタのメンテナンスを中心としています。

- ◆機械設備改修：空調設備の改修など
- ◆電気設備改修：展示室照明など
- ◆建築改修：展示ケースの改修など
- ◆エレベーター改修

こうした館心臓部のメンテナンスは、永く市民のみなさんの文化財である収蔵品を守るため、展示空間を万全な体制にするため、さらに快適にご利用いただくための館にとって大事な改修工事です。

改修工事の現場感をお届けするため、アルカディアでは工事の様子を連載して皆様にご報告していく予定です。次は秋号でお会いしましょう。お楽しみに！



日はまた昇る  
(金沢)

岡崎市史料叢書

令和五年三月刊行にむけて岡崎市史料叢書「岡崎町方文書」の準備を当館では進めています。

近世岡崎の城下町と宿場町に関する史料を収録します。商家である糸惣や大黒屋などを中心に町方に伝来した文書を翻刻紹介します。糸惣小野家伝来の「筆記」二冊は、岡崎城下一九か町の概要を書き留めるとともに、宿場岡崎に出された幕府法令などを書き留めています。

また、大黒屋小野家の「庄屋役中諸事陶」は、重要な法令のほかに岡崎町における出来事、慣例や仕来りなどを克明に記しています。たとえば、町同士の町格をめぐる争い、捨て子があつた時の処理など、いづれも、庄屋を勤めるうえで必要不可欠の情報を書き留めています。これらは、大磯家旧蔵の町政を取り仕切る町年寄の運用マニュアルである「町年寄日用記」とともに岡崎町の基本史料です。このほかに、人馬会所での継立の様子や町人の毎日の生活を綴った日記なども収録。近世岡崎町の活気にみちた様子を窺うことができます。ご期待ください。

(堀江)

NEW FACE

前島 豊

四月から美術博物館へ配属となりました。前島豊と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。美術博物館は初めてですが、平成二十九年度から四年間を美術館（明大寺町）で勤務しておりました。その頃は、この「ARCADIA」を毎号楽しみに読んでいましたが、自ら原稿を書く日が訪れるとは想像していませんでした。ビックリです。

私の住まいは、市東部の額田地区で男川沿いにあります。岡崎さくらマップでも紹介されている場所（マップの写真では、家が桜に隠れています）ですので、開花時には素晴らしい情景となります。また、子供が小さかった頃には、庭でホタルを見ることもできました。私自身には誇れるものを何も持っていませんが、この住まいのロケーションは自慢できます。そして、新たな勤務先となったこの美術博物館も、中央総合公園内で緑に囲まれ、恩賜池や市街を見渡すことができる、これまた素晴らしいロケーションにあります。こんな素晴らしい環境で生活し仕事もできるなんて、何て幸せ者なんでしょう。

皆様にも、美術博物館にお越しただいた際には、展覧会と併せてこの素晴らしい情景も楽しんでいただければ嬉しいです。



金沢 実徳

新しく教育普及担当として採用されました金沢実徳です。前職は市内のアート・コディネート会社と人とアート、街を駆け回り、地域と人とアートをつなぐ仕事をしていました。気がつけば岡崎に住んで十年が経ちます。慣れ親しんだ街でまた新しい縁をいただき、これからも文化芸術に関わっていただけることがうれしいです。どうぞよろしくお願ひします。

美術博物館で美術や歴史の専門ではなく、教育普及担当って一体なにをするの？と思う方もいらっしゃるのでは無いでしょうか。教育普及の役割は分野を超えて美博と人とが関わり合えるシチュエーションをつくり、活発な交流の場を設けることだと思っています。

実は私は、令和二年からパート職員としてすでに当館に所属していました。この二年間は、どのようには美術・博物館の垣根を越えて館の活動を広げたいか、分野を反復横跳びしながら模索していました。今後は美博と人をつなぐシチュエーションづくりを少しずつ進めていきたいです。コロナで中止している学校連携の再開や新しい当館の楽しみ方を提供できるよう、市民のみなさんと一緒に考えていけたらと思っています。



今年1月の本宮山登山。寒かったけれど、富士山を拝むことができ幸せでした！

## SHOP INFORMATION



岡崎市内で回収された廃ガラスびんを再利用したリサイクルガラスを原料として、様々な作品を制作する「岡崎ガラス工房 葵」。その工房で生み出される美しさと実用性を兼ね備えたガラスの工芸品が並ぶ「うつわのかたち -vol.4-」を6月28日～7月10日まで開催しております。この企画展のために制作された一輪挿し、グラス、小鉢、プレートなど美しく涼しげなアイテムが多数並びます。すべて手作業で制作されており、二つと同じものがない一点もの。ぜひ、この機会にお気に入りのうつわを見つけて来てください。

営業時間 10:00 - 17:00  
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)  
TEL 0564-83-5952  
FAX 0564-83-5953  
MAIL yagura@b-soup.com  
HP https://www.b-soup.com

## YOUR TABLE

岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事することができます。展示毎にシェフ考案のコラボメニューも登場。カフェタイムにはケーキセットや軽食などを販売中。

営業時間 11:00～21:00  
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)  
LUNCH 11:00 - 14:30 (L.O.14:00)  
TEA 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)  
DINNER 18:00 - 21:00 (L.O.20:00) ※平日木曜日のみディナーはお休みです  
TEL 0564-28-0141  
HP https://your-table.owst.jp

## YOU USED TO BE



全国でも最古クラスの公園の一つである「岡崎公園」。市民の憩いの場として、長い歴史の間に姿を変えてきました。今日は戦争前の様子をご紹介します。

この頃、お城は解体されてしまい影も形もありませんでしたが、かわりに水上飛行機や大砲が展示されており、運動ができるグラウンドもありました。

当時は桜だけではなく梅の花も沢山植えられており、長い間花見を楽しむことができました。昔生川まで広がる桜の壮観は昔から変わりなく、夜桜を楽しむために名鉄電車が鉄橋の上で明かりを消して停まってくれる、という一幕もあったそうです。春の河川敷では宴会が開かれ、船あそびも盛んでした。

園内には売店が点在していましたが、コーヒーを売るハイカラな所もありました。戦時中は甘味が手に入らなくなったため、一色から仕入れたマテ貝を茹でて串に刺し、花見団子に見立てて売っていたそうです。

現在の家康館の場所には図書館が建っており、子供向けコーナーには「少年倶楽部」などの流行雑誌が並ぶ先進的なものでした。花時計の場所には市民病院の前身である県立岡崎病院がありました。昭和二〇年の空襲で図書館と共に焼けてしまい、多くの方が被害を受けました。(米田)

表紙画像：大型常夜灯《エニシダの花と枝》1920年 北澤美術館所蔵 撮影：清水哲郎



開館時間 午前10時～午後5時  
※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない日)  
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

HP <https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

# ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

【岡崎市美術館ニュース/アルカディア】 第91号 2022年7月発行  
編集・発行 岡崎市美術館  
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町幹1番地 岡崎中央総合公園内  
TEL 0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館